

【一生働く！】〈健康編〉高齢期の生活と健康

(1) バリアフリーなど生活機能低下への対応

2020.7.8



「FUSII（ファスツー）」

65歳以上の高齢者の事故発生場所は、屋外より住宅が多く、その割合は77%にもなる。（独立行政法人国民生活センター調べ）。高齢者が暮らしやすい家づくりについて考えたい。

■手すり取り付け需要9割

高齢になると筋力が衰えるだけでなく、老眼や白内障などで視力が低下するため、わずかな段差でもつまずいて転倒しやすくなる。

介護向け住宅リフォーム事業を手掛けるユニバーサルスペースの代表、遠藤哉さん（45）は「手すりの取り付けや段差解消を行う介護リフォームの需要自体は増えているものの、役所の申請手続きが煩雑な上、工事費用も少額なので業者側になかなか浸透しないという実態がありました」と話す。

そうした背景から同社は18年に工事の見積もり作成アプリケーションシステム「FUSII（ファスツー）」＝写真＝の運用を直営店とフランチャイズ（FC）加盟店で開始。施工までの期間を大幅に短縮できるようになった。

介護リフォームには、手すりの取り付け、段差の解消、洋式便器などへの便器の取り替えなどがあげられるが、「全体の9割を占めるのが手すりの取り付け工事」と遠藤さん。工事費用は介護保険制度を利用することで、1割（所得によって2～3割）の自己負担で利用でき、実質1000円ほどでサービスを利用できるものもある。

介護リフォームを行うことで、介護をする側の負担も軽減される。排泄（はいせつ）の介助をする際には、廊下やトイレ内に手すりが設置してあると介助もスムーズになる。「命の絆を作ってくれてありがとうという喜びの声が、サービスを利用した高齢者から届いている」と遠藤さんは話す。

■お世話する介護から自立支援介護へ

厚生労働省が公表している「介護保険事業状況報告」によると、要介護（要支援）の認定者数は16年に633万人に達し、過去17年間で約2・9倍に増加している。

団塊世代が75歳を迎える25年はすぐそこに迫っており、今後も要介護認定者は増え続けると予測できることから、政府は「お世話する介護」から本人が望む限り回復を目指す「自立支援介護」にシフトした。住み慣れた自宅で安心安全に暮らせる環境整備を行うことを喫緊の課題としている。（「オレンジ世代」取材班）

©2017 The Sankei Shimbun & SANKEI DIGITAL